



Data	
監督・脚本:	アンドレイ・ズビャギンツェフ
出演:	マルヤーナ・スピヴァク/アレクセイ・ロズィン/マトヴェイ・ノヴィコフ/マリナ・ヴァシーリエヴァ/アンドリス・ケイシス/ナタリア・ポタポワ/アレクセイ・ファテーエフ

👁️👁️ みどころ

中国映画の『我愛你 (ウォ・アイ・ニー)』(03年)とアンジェリーナ・ジョリー主演の『チェンジリング』(08年)を合わせたようなロシア人監督アンドレイ・ズビャギンツェフの第5作目は、さすがに奥が深い。ロシア語の原題『ニェリュボーフィ』は無理に訳せば「悲愛」とでもなるそうだが、『ラブレス』という題は、わかったようでわからないような・・・。

「W不倫」は離婚原因として十分だが、夫も妻も子供の親権はいらないという離婚協議は珍しい。前半はそれほど身勝手なW不倫ぶりに注目だが、後半は非営利の捜索救助ボランティア団体「ヴェラ」の活動に注目！へえ、ロシアにはこんな団体が・・・。

さらに注目したいのはロシアのマンション事情。上中下の3レベルをしっかりと見比べれば、2014年のウクライナ危機以降のロシアのマンション事情もバッチリだ。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■このロシア人監督の第5作目は必見！■

本作は既に見た『ナチュラル・ウーマン』(18年)や、これから鑑賞予定の『ザ・スクエア 思いやりの聖域』(17年)、『心と体と』(17年)等と並んで、2018年の第90回アカデミー賞の外国語映画賞にノミネートされていたが、受賞作は『ナチュラル・ウーマン』だった。3月16日に観た、近時流行の同性愛映画である『ナチュラル・ウーマン』の主人公は目力の強さが印象的で、作品全体としてもインパクトが強かったが、私の評価はイマイチで、星3つだった。それなのに、第2作目の『ヴェラの祈り』(07年)、『シネマ35』

165頁)、第4作目の『裁かれるは善人のみ』(14年)、『シネマ37』162頁)で強烈な印象を残したロシア人監督アンドレイ・ズビャギンツェフ監督の第5作目となる本作は、なぜ受賞できなかったの・・・？

アカデミー賞の外国語映画賞にノミネートされる以前に、本作は第70回カンヌ国際映画祭で審査委員賞を受賞する等、高い評価を受けていた。アンドレイ・ズビャギンツェフ監督の第1作目の『父、帰る』(03年)と、第3作目『エレナの惑い』(11年)は観ていないが、2作目と4作目に感銘を受けた私にとってアンドレイ・ズビャギンツェフ監督の第5作目となる本作は必見！そう考え、シニア料金を払って映画館へ行くことに。

■□■タイトルの意味は？原題は？テーマは？■□■

『ヴェラの祈り』のテーマは『子供ができたの、あなたの子供ではないけれど・・・』だったから、そもそも、そのテーマ自体が身勝手なものだった。また、『裁かれるは善人のみ』は、その邦題が刺激的なら、原題の『LEVIATHAN』も含蓄が深いものだった。そこで描かれた、権力をカサにきた土地収用は日本の悪代官も悪徳商人とグルになってやってきたものだが、中国のそれと同じように、ロシアのそれは露骨でえぐい。さらにロシアではそこに教会が絡むから、「神も仏もないものか！」と叫びたくなってくるようなものだった。それに対して本作は、愛が冷めてしまった中年夫婦の離婚をテーマにするものだが、『ラブレス』という邦題を見るだけで監督が模索する深淵なテーマが想定できる。

本作のパンフレットにある沼野充義氏(ロシア文学者・東京大学教授)の解説《愛なき世界の悲劇と希望 — 『ラブレス』の翻訳不可能性と普遍性》によると、本作のロシア語の原題は『ニェリュボーフィ』。これは新造語ではないものの、あまり頻繁に使われる単語ではないらしい。監督はこれについて「単に愛がない状態ではなく、むしろその対極であり、卑俗な憎しみもなければ冷たい無関心でもない。何かそれ以上のものです。英訳のLovelessというも違う」と説明している。そのため、沼野氏はこの解説に《『ラブレス』の翻訳不可能性と普遍性》というサブタイトルをつけたわけだ。さらに、ロシア語がわからない私たちには到底理解できないが、本作にはタイトルだけでなく、ロシア語で「マート」という“罵倒の言葉”が多用されているらしい。なるほど、なるほど・・・。

さあ、アカデミー外国映画賞は『ナチュラル・ウーマン』に譲ったものの、『ラブレス』といういかにも意味シンのタイトルの本作の完成度は・・・？

■□■夫婦喧嘩にウンザリ。子供の親権は？■□■

張元(チャン・ユアン)監督の中国映画『我愛你(ウォ・アイ・ニー)』(03年)は、犬も食わないはずの夫婦喧嘩を、中国四大女優の1人である徐静蕾(シュー・ジンレイ)の熱演で魅せた、風変わりな映画だった(『シネマ17』345頁)。それと同じように、本作の導入部も一流企業で働く夫ボリス(アレクセイ・ロズィン)、美容サロンでマネジメントを

任されている妻ジェーニャ（マルヤーナ・スピヴァク）の夫婦喧嘩のシーンから始まる。

現在2人は離婚協議中で、12歳の息子アレクセイ（マトヴェイ・ノヴィコフ）と家族3人で住んでいる美しい緑に囲まれたマンションも買い手が決まりかけているらしい。アレクセイはひとり涙しながら両親の言い争いを聞いていたが、さて彼の心境は・・・？ボリスとジェーニャの直接の論争はどうしても感情的になってしまうから、そこでは英語の「ファック」に相当するロシア語の「マート」という汚い言葉も多用されているらしい。前記、沼野解説によれば、ロシア語には元来こういった卑猥な罵りが豊富だが、文学や映画では禁忌とされ、映画の中でこういう言葉を聞くことはほとんどなかった。ところが、監督はこのタブーを大胆に打ち破ることで登場人物の感情を生々しく伝えている。しかし、ロシアでは最近こういった「汚い」言葉を芝居や演劇などで使うことが法律で禁止されてしまったため、この映画はこのままではロシアでは公開できないらしい。

現在、私が担当しているある離婚事件では、2人の子供の親権を父と母がともに自分のものだという言い分で争っているが、本作ではボリスもジェーニャも、二人とも息子を引き取りたくないのが本心。だって、夫のボリスは若い恋人マーシャ（マリナ・ヴァシーリエヴァ）が妊娠中だし、ジェーニャの方はもともと子供を産んだこと自体を後悔している上、自分は子供を愛せないでいると裕福な年上の恋人アントン（アンドリス・ケイシス）に告白しているほどなのだから。これでは、離婚とそれに伴うマンション売却による金銭的精算はできても、子供の親権はどうなるの・・・？本作前半にみる夫婦喧嘩の実態からは、そんな大変な問題点が浮かび上がってきたが・・・。

■□■ダブル不倫の実態は？その身勝手さは？■□■

ハリウッド映画ではキレイな女優さんのヌードシーンがつきものだが、ロシア映画では、ましてズビギャンツェフ監督の映画では、そんなものは無用。私はそう思っていたが、意外にも本作前半では夫ボリスが若い恋人マーシャと繰り広げるベッドシーンや、妻ジェーニャが年上の恋人アントンと繰り広げるベッドシーンが生々しく描かれるから、ビックリ！ズビギャンツェフ監督は、ボリスとジェーニャが新たに結ばれるそれぞれの恋人とのセックスを丁寧に描いたことについて、現在の愛のない夫婦生活から逃げ、「不倫」に走った男女が愛し合い、互いの身体を求めあっていることを示すことが何よりも必要だったからだ。そのためには「二つのカップルをどちらも、完全に裸の状態で見せなければならなかった」と語っている。

4月17日に観た『娼年』（17年）では、人気俳優・松坂桃李が文字通り“裸の演技”でさまざまな女性を相手に「R18+」の演技をみせていたが、本作で見せるボリスとジェーニャの「性態」もかなり濃密だ。もともと、コトが終われば、話題はボリスもジェーニャも妻や夫への不満と悪口ばかりだから、恋人も疲れるのでは・・・？夫も妻も1日も早く離婚協議をまとめたいたのだが、そこで面白いのは、ボリスが務める会社では社員の離

婚が会社に発覚すると出世の道が閉ざされるばかりか、クビにされるかもしれないという実態があること。マンションの売却は順調に進んでいるようだが、2人の離婚には「親権者をどうするか」以外にも、そのような乗り越えなければならぬ障害が多いようだ。

しかして、2人の夫婦喧嘩を聞いているだけでは容易にわからない「離婚原因」も、2人のダブル不倫の実態と、互いの恋人に語る妻や夫への不満ぶりを聞いているとよくわかる。そして何よりも、その中にこの夫婦の身勝手さがはっきり見えてくるので、そこに注目！両親は二人とも自分の身勝手さに気づいていないようだが、スクリーン上にとときき少しだけ姿を見せる一人息子アレクセイの想いは・・・？離婚調停ならそこにしっかり目が届くはずだが、そこを完全に無視して進む2人の離婚協議の中、ある日突然アレクセイが行方不明になることに。

■□■非営利の捜索救助ボランティア「ヴェラ」に注目！■□■

アンジェリーナ・ジョリー主演の『チェンジリング』(08年)は、「さらった子供の代わりに妖精が置いていく醜い子供」という伝説に基づく面白い映画だった(『シネマ 22』51頁)。そこでは、警察が失踪した子供を真剣に捜索しないため、何と子供の替え玉事件に発展してしまったからビックリ！民主主義国のアメリカでさえ、子供の失踪事件にはその程度のいい加減な捜索しかしてくれないのだから、ロシアならなおさら。そう思っていると、案の定、警察は「反抗期だから10日もすれば戻るだろう」と言うだけで取り合ってくれないから、失踪を届け出たジェーニャはあぐり。

そこで本作に登場するのが、市民ボランティアの捜索救助団体「ヴェラ」だが、ロシアにそんな組織があることにビックリ。本作に見る「ヴェラ」のコーディネーター(アレクセイ・ファターエフ)と、この組織の統率力、行動力はすごい。第1に、アレクセイがおばあちゃんの家に行っている可能性を探ったのは当然。そこで、ボリスとジェーニャはいやいながらコーディネーターの指示に従ってジェーニャの母(ナタリア・ポタポワ)の家を訪問したが、そこに見る母娘間の決裂ぶりはすごい。いかに娘の妊娠や結婚が気に入らなかったとはいえ、実の娘によくここまで悪態をつけるものだとは一方では感心し、他方ではこの先もし母親が病気ででもなれば一体どうするの？と心配してしまったが、それはいらぬお節介だろう。しかも、何の成果もないまま帰る2人は、車の中で始めた夫婦喧嘩がエスカレートし、車を停めたボリスはジェーニャを道路上に置き去りにしてしまったから、この夫婦の決裂ぶりもすごい。それでも2人はアレクセイの捜索には懸命に付き添って活動したが、ある日よく似た少年が発見されたとの報を聞いて駆けつけてみると・・・。

■□■ロシアのマンションはこんな実態！その変化にビックリ■□■

近時の中国、とりわけ北京・上海を中心にした不動産事情とマンション事情を私はよく知っているが、ロシアのそれについては全く知らなかった。しかして、本作では“中流の

上”に位置するであろうボリス・ジェーニャ夫妻が住むマンションに注目！まず、おしゃれなドアが目につくが、部屋はほどほどの広さで、かなり美しい。ビックリするのは、このマンションが美しい緑に囲まれていること。これは東京、大阪はもちろん、中国でも考えられない環境だ。

他方、ボリスの恋人マーシャも母親と2人でマンションに住んでいるが、こちらは“中流の下”クラス。部屋の作りそのものが平凡そうだし、ここにボリスが転がり込んでくればどうしても部屋は狭くなってしまっただろう。ビックリさせられるのは、アントンのマンション。その広さにビックリするとともに、広い台所、リビングルームと大きなベッドルームが一体の空間としてコーディネートされていることにビックリ。これは、台所で抱き合ったままベッドルームに移動し、濃密なラブシーンを見せやすくするための特殊なセットかもしれないが、こんな広い空間を温めるには暖房代がいくらかかるの？とらざる心配も。さらに、なんとラスト近くでは、ベッドから起き出したジェーニャがそのままブランドンに出て、そこに設置されたランニングマシーンで運動を始めたから、これにもビックリ。そりゃ室外でこんな運動ができれば気持ちいいだろうが、雪の多いロシアで本当にこんな設置ができるの？ルームランナーはあくまでルームランナーとして使わなければ、すぐに汚れてしまうし、機能が停止してしまうのでは・・・？本作では、社会主義国ロシアにこんなおしゃれなデザイナーズマンションがたくさんできているという変化にも注目したい。

■□■時代背景は？失踪事件の結末は？■□■

シリア時間の4月14日未明、米英仏軍は科学兵器使用疑惑のあるシリアに対してミサイル105発を発射したが、それに強硬に反発しているのがロシア。しかし2014年に深刻なウクライナ危機を引き起こしたのはロシアだ。映画監督は何よりも感性が大切だから、自分の政治的立場はともかく、政治や軍事の動きについては敏感なはず。そのため、前記解説によれば、監督自身はあるインタビューで「自由な人間がみるみるうちに茫然自失した人間に変わった」と述べている。

そして、ズビャギンツェフ監督は本作の時代背景を観客にわからせる（推察させる）ため、頻繁にラジオやテレビのニュースを流すという手法をとっている。その内容は日本人でも日頃から新聞やテレビの国際ニュースに関心を持っていなければわからないものばかりだが、パンフレットによると、本作は2012年10月～2015年2月までの約2年半を背景としたもの。パンフレットにある、『私は悲観主義ではなく、現実的なのです』と題するズビャギンツェフ監督のインタビューの中で、彼は「ロシアにとって、過去15年で最も重要な時期です。政治体制がよりよく変わって欲しいという期待が生まれたにも関わらず、最終的には15年2月に政府が反体制派の抗議運動を鎮圧し、ネジを締めた。高圧的なやり方で国民を鎮圧したのです。」と語っている。また、それによって「人々の未来

を信じたい気持ちだが、何も変わらないのだらうという諦めの気持ちに変わり、無気力になっていきました。政治的な冬が到来したのです。」「このロシアの情勢と映画の中の夫婦の関係が崩壊している様子がシンクロしているのです。」と語っている。

しかし映画は監督の政治的メッセージを伝えるための芸術ではないから、同時に監督は「私は映画で政治的メッセージを訴えようとは思いません。もし、この映画が政治的メッセージしか持ちえてなければ、国境を超えて外国で評価されることもなかったでしょう。私は普遍的なメッセージに興味があるのです。」「他人への思いやり、共感、尊敬がいかに大事なことか。これこそが人間性が失われつつある現代人への警告なのです。」とも語っている。これには私もまったく同感だ。

現在のイラン情勢も複雑で容易にわからないし、数年前のウクライナ危機もその実態を理解するのは難しい。そんな政治・軍事情勢下にあったロシアで、ボリス・ジェーニャ夫婦は何とも身勝手な離婚騒動を繰り広げていたわけだ。しかして、その副産物として発生したと考えられる、一人息子アレクセイの失踪事件の結末は？映画の中ではその結末はあえてボヤかされている(?)から、それはあなた自身の目でしっかりと！

2018 (平成30) 年 4月20日記